



自転車がまちに利く ～ 住民参画の自転車まちづくり ～

やまもと ゆう こ
NPO 法人 シクロツーリズムしまなみ **山本 優子**



橋上へのスロープもゆるやかで、走りやすい

全国の自転車愛好者が「一度は走ってみたい」と羨望する「しまなみ海道」。お奨め度No.1のサイクリングコースと、巻頭インタビューに登場している疋田智氏をはじめ、自転車オピニオンリーダーにも太鼓判をおされている。風光明媚な風景はもちろん、快適な自転車走行レーンが整っていることは要因の一つ。島内の主要道にはサイクリング用の標識も充実している。自転車の走行環境が整っていない日本において、「しまなみ海道」は画期的に自転車施策が進んでいる。

この特性をいかし、自転車まちづくりを進めるのが「NPO法人シクロツーリズムしまなみ」だ。「海道」沿線の住民とタッグを組み、資源発掘、商品開発に取り組んできた。2009年4月、足掛け



サイクルトレインの車内。
2011年度は8回運行



船と自転車を組み合わせた旅はこの地域ならではの

5年目に自転車をブランドイメージに、地域観光振興を進める組織として法人化した。ここ数年、本会が進めてきたいくつかの事業を紹介したい。

●自転車と公共交通機関の共存

官民協働で進めてきた事業の一つが、自転車を解体せず車内に持ち込める「サイクルトレインしまなみ号」である。通常、公共交通機関を利用する場合、自転車は分解し専用の袋（輪行袋）に入れて持ち込まねばならない。当地では、自転車を押してそのまま車内へ、そして愛車を傍らに都市間を移動できる手軽さが幅広い年齢層に支持されている。

さて、「サイクルトレイン」で「海道」のたもとに到着。ここからスタートする「ガイドツアー」が人気だ。橋を渡るだけではなく、独特の島風景が残る路地裏、プライベートビーチ等にガイドが案内、島民との交流を促すプログラムもある。自転車で疲れたら、船に乗せて対岸へ。古より海上交通の要衝であった瀬戸内海を丸ごと楽しむ、そんな粋な演出も喜ばれる。ただ、手荷物（輪行した状態）にしないと載せられなかったり、積載台数に限りがあったりと、船に自転車を載せるのはハードルがある。

自転車旅行（シクロツーリズム）文化が定着しているとはいえな日本。鉄道にしる、船にしる、公共交通機関にそのまま自転車を



積載するのは一般的ではない。とはいえ、環境に優しいさまざまな乗り物がサイクリストの二次交通として活用されはじめている事実、大きな期待を抱いている。

●しまなみサイクルオアシス

自転車旅行者と住民の関わりも日進月歩だ。農家による「畑カフェ」の開店、自転車旅行者向けの携帯用弁当「二輪弁」の製造等は、毎日の暮らしの延長からアイデアが生まれた。作り手の顔が見える安心感。そして、旅行者からその場で改善のフィードバックがあって一石二鳥。ニーズへの柔軟な対応、演出の工夫も実地で学んでいる最中だ。

そんななか、新たな試みとして「しまなみサイクルオアシス」が2011年夏にオープンした。住民の有志が、自分の家の軒先等を休憩所として開放するというもの。途中でパンクや荒天に襲われる等、トラブルもあるサイクリストのバックアップになればと、住民が動いたのだ。自転車をとめやすいように専用スタンドをおき、休憩用のベンチを配置。給水やトイレ利用も可能だ。愛媛県からスタートした取り組みは、広島県側にも波及し、海道沿線に約40ヶ所できた。住民の発意、県境を越えた連携は、地域活性化にまたとない好機といえよう。



本会編纂の「自転車ロードマップ・鳥走マップ」も常備



交差点や信号等の点検、資源の発掘を進める住民

●自転車をまちに取り入れる

「海道」のお膝元、今治市においては、中心市街地活性化に自転車活用を考える官民協働のプロジェクトが始動している。都市郊外化・ドーナツ化現象に悩む中心地の再生に、徒歩や自転車を優先したまちづくりは一つのうねりだが、「海道」のためとにある町が取り組むのは、言わずもがなメリットがある。橋を降りて中心部まではたった7km。誘うルートも潮風を感じる絶景、かつ歴史的資源が豊富なエリアだ。しまなみを目指してきた自転車旅行者を導き入れない手はない。これを起爆剤に、自転車の利便性の啓発、車から自転車への乗り換え等を促進し、「自転車のまち」づくりを推し進めていく構えをみせている。

既にスポーツバイクの往来が日常的な場所だけに、クルマのドライバーの運転が自転車に優しく、走りやすいとの声もある。車中心の日本において、道路に自転車走行空間が乏しいのはどの町も同じだが、心の目がサイクリストに拓いているのは心強いではないか。

自転車がまちに利く。仮説を立ててはじまった住民参画型の事業は、確信に変わりつつある。ただ、制度やシステムにとどまらず、マナーに欠ける自転車運転の横行等、課題が多い中、地道で息の長い

取り組みが求められそう。それでも前進している日々躍動感がある。自転車が展望するまちづくりビジョンは、次世代へ受け渡す未来構築の事業なのだから。